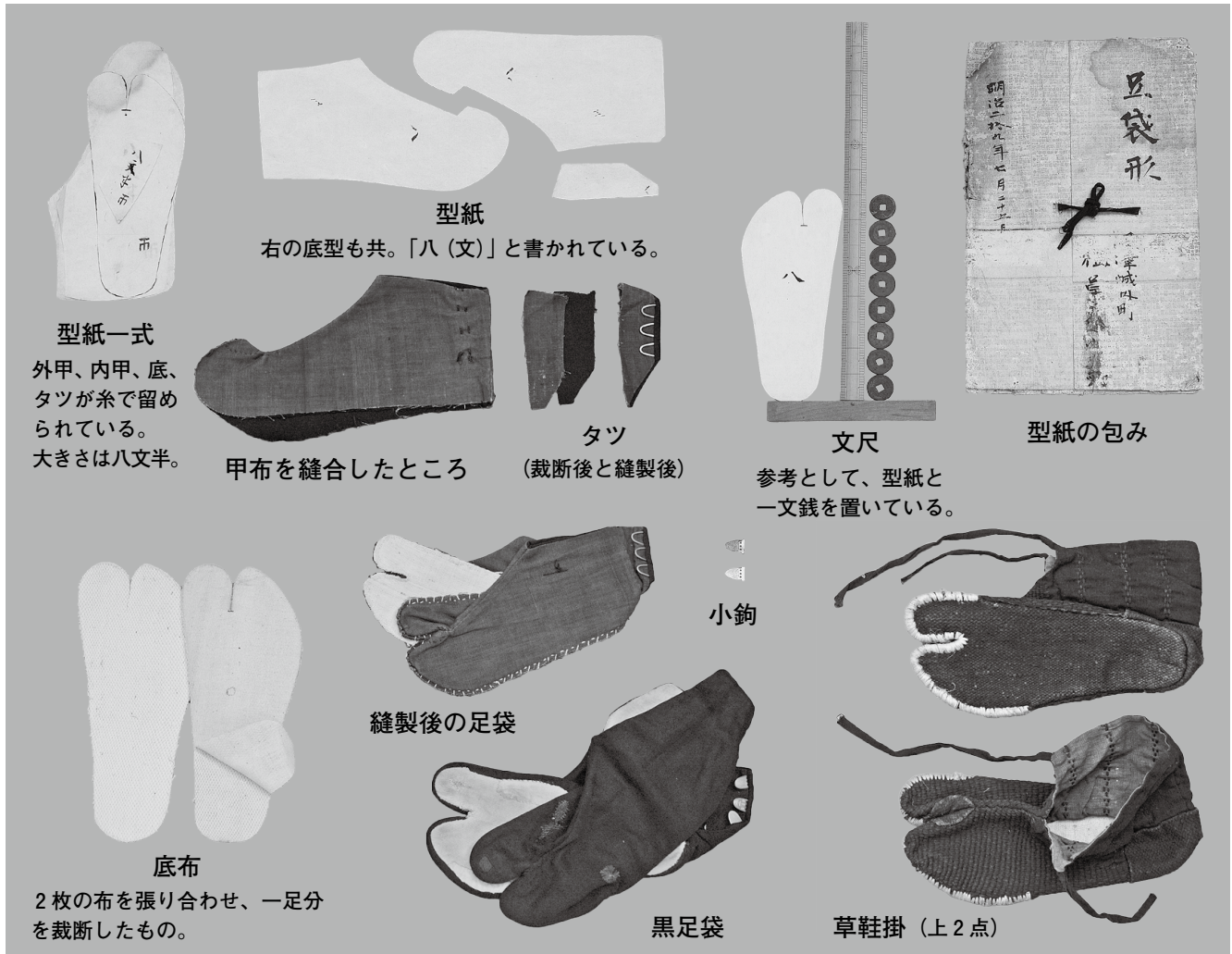




寄贈資料の中から

今回は足袋に関する資料を紹介します。

足袋は礼装や防寒、労働用の履物です。古くは紐で結ぶ形式で指が分かれていませんでした。鎌倉時代になって、指股の分かれた革製の足袋が出現しました。江戸時代には木綿製が普及し、その後、小鉤^{こはげ}という爪形の留具を使った足袋ができ、現在の形になりました。

文尺もんじゃくは足の寸法を測る足袋製作用物差しです。踵かかとから親指の先までの長さを測ります。江戸時代に、寛永通宝の一文銭を並べて測定したことから生まれました。

写真の型紙は明治時代のもので、型紙をつくるには、足の長さや幅、甲の高さなど十ヶ所程を採寸します。外甲と内甲、底、タツと呼ばれる小鉤がつく部分の4枚の型紙で一足分となります。タツは大正時代までみられ、昭和に入ると甲布と一体化します。

写真中央と左下は製作途中のものです。型紙に合わせて表地と裏地を裁断し、縫代が外に出ないように縫い合わせます。縫製が終わると裏返して縫い目をつぶし、履きやすい状態に整えて完成します。

中央下の黒足袋は男性の普段履きです。内側に起毛のフランネル生地を使った冬物です。鼻緒の当たる箇所に刺子を施したり、親指の先や底にあて布などの補修がされており、大切にしていた様子がうかがえます。

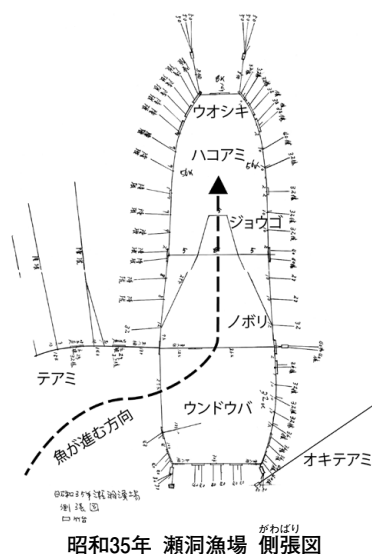
右下は草鞋掛で、足首に紐で結びつけて履きます。
労働時や、草鞋と合わせて使用します。紺の木綿製で
すべて手縫いです。甲の部分を刺子に、爪先を外側
から麻でかがっています。底は丈夫な石底織ですが、
メリヤス布を3枚重ねてさらに厚くしています。指の
股と踵側面にも石底織の布があてられています。

駿河湾の漁

川上 貢さんの漁話

お せ せ ぼ ら
大瀬瀬洞漁場の定置網漁

大瀬崎のそばに定置網を仕掛けた



昭和25年から50年まで、岩手の漁師に来てもらい、南部式の定置網を操業した。ハコアミ（箱網：3寸目）、ノボリ（登網：5寸目）、ウンドウバ（囲い網：5寸目）、テアミ（誘導網：3尺目・5尺目）からなる定置網で、「ダイボウアミ」と呼んでいた。駿河湾の奥深く

千本浜まで北上した魚群が、東西に分かれて陸沿いに戻り、大瀬崎の先へ抜けるとところに仕掛けた。ハコアミからウンドウバまでが116間（約174m）あり、オキテアミが150間（約225m）延びていた。

2月の初めに岩手から船頭が若い漁師たちを連れてきた。所帯を持つ人はいなかった。3月半ばまで資材の支度をし、定置網を仕掛けた。その当時は手作りだったので、支度には時間がかかった。

漁は毎年3月半ばから10月まで、朝夕2回「網起こし」をした。漁には50馬力の焼玉の動力船、無動力船のオオナカ、ガワフネ2艘を使い、30人ほどで網をたぐり、ハコアミに入った魚を捕った。動力船が3艘を繋いで網まで曳いて行った。3艘は曳航する網を外して勢いのまま梶を切り、ガワ（網の縁）のロープを乗り越えて網の中へ入った。凧のときには岩手の哀愁を帯びた歌を歌いながら、櫓で漕いで行った。動力船はハコアミの先端のウオシキ（魚捕り）の外側に着けた。

オオナカとガワフネにはカグラサン（網の巻揚げ機）があった。それを使いハコアミの入口の網底についた網を巻揚げ、魚の退路を断った。そしてオオナ

カを中心に船3艘が連なって並び、ハコアミをジョウゴの側から手でたぐり上げて、魚を追込んだ。前方へ向かって網をたぐり、その力で船が進んだ。カグラサンは昭和45年ごろには動力巻揚げ機にかわり、網をたぐるのにも使用するようになると、人手は省かれていった。

オオナカの「ヤリ」というT字型の杭に巻かれたロープの端には鉤がついていた。その鉤をジョウゴのワイヤーに掛け、ロープを少しずつ延ばすことで3艘の船の進み具合を調節した。ウオシキまでくると、ロープは長く延びた。漁を終えてこれを外すには、ロープを強く引いてパツと離すと、反動によって鉤が外れた。

ウオシキまで網をたぐると魚がたくさん乗り、それをタモで動力船へあげた。ウオシキの網はゴワゴワして目が細かく、手でつかみにくいため、竿の先に鉤の付いたカギダケを使った。魚が死ぬと途端に網が重くなるので、急いで魚をあげた。捕れた魚は鮮度を保つために木槌で頭を殴ったが、大漁の時はそのまま船に魚を積み込んで、急いで市場へ行った。捕れた魚は氷と一緒に動力船のカメ（魚艙）に積み、30分ほど走って沼津の魚市場へ運んだ。朝夕当番で3～4人が乗り込み、狩野川にあった市場に魚をあげた。

魚がある（大漁が続く）ときには、テンマ船でハコアミへ入って魚が入るのを見張った。覆いをかけて海中をメガネで覗き、魚が入っていることがわかったら、2尋くらいの竿に、手ぬぐいや赤い布をつけたマネをあげて陸へ向かって合図をし、「臨時起こし」をした。

魚はメジ（メジマグロ）やブリ、アジが多かった。メジが3千本も捕れたことがあったが、そのときは2艘のガワフネのイタゴ（船の床板）を外して魚を積み込み、動力船で曳航して市場へ運んだ。大漁で船が足りないと、地元の定期線、共愛丸に頼んで運んでももらったりもした。

これらは、昭和30年代の漁の話である。



ウオシキいっぱいの魚がしぶきをあげる様子

（話：川上貢氏 1930年生まれ 沼津市今沢在住）

資料館の調査ノートから②

絵葉書に見る「イヌクグリ」の風景

現在開催中の企画展「海辺の情景～絵葉書に見る地先の漁場～」の参考資料の中から、「イヌクグリ」を取り上げご紹介します。



写真の左側の崖附近は、口野と内浦重寺との境です。昔は伊豆国と駿河国の国境でもありました。『駿河志料』巻之

六十四 口野の項、「国境」には「此地は豆州君澤郡重寺村と接して、駿豆の分境なり、金櫻小祠ある山の背通り、山鼻に犬潜^{くぐり}と云所を見通し、海中に石あり、これを境とせり」と記されています。

この地は「イヌクグリ」とも「イヅ（伊豆）クグリ」とも呼ばれています。その名の由来は「この涯山は、犬も通れない、犬は海を潜って渡ると云う意味からと、伝えられている。別名伊豆潜とも云うが、語源は定かでない。『口野の歴史マップ』足立実著」と伝えられています。

「犬潜り」という言葉自体は「垣根や塀などで、犬の出入りする穴（広辞苑第五版）」のことでもあり、また古語で「潜り」は「『潜り戸』『潜り門』の略（明解古語辞典新版／三省堂）」の意味でもあります。

なぜ「イヌクグリ」あるいは「イヅクグリ」と呼ばれているのか、現在の様子からはわかりません。しかし、昔の絵葉書からその理由をうかがい知ることができます。

<資料①>



上の絵葉書は、明治40年～大正7年の間に発行された絵葉書で、口野にある代官岩附近から内浦重寺方面



を写したものです。左下の、ぽっかり開いた受け口のような形のところが「イヌクグリ」です。海食洞といって、潮や波の浸食により形作られた天然の洞です。この受け口状の形から「犬潜り」や「潜り門」になぞらえたのであろうと想像できます。

次に、資料①の左上に注目します。大きな松の中腹部分に櫓^{やぐら}が建てられているのがわかるでしょうか。これはマグロ建切網漁の際、魚群の動きをいち早く察知し仲間に知らせるために作られたヨミド（魚見所）です。この魚見の櫓にミネドンと呼ばれる魚群の監視役が登り、ここから仲間の漁師たちに指示を出していました。

<資料②>



上の絵図は、口野の代官岩から「イヌクグリ」のあたりでのマグロ建切網漁の様子を描いた奉納絵馬です。この付近は「イカヅケ」と呼ばれる、潮に乗って回遊魚がやってくる大変良好な漁場でした。

「イヌクグリ」は絵図の右端にあります。一番右の山に大きな魚見の松に櫓が作られ、そこにミネドンが登って指示を出している様子が描かれています。

この絵図は大正2年に描かれており、ほぼ資料①の絵葉書の時期と重なります。絵図に描かれたヨミドの姿を、絵葉書によって確認することができます。

参考資料：

- ① 絵葉書「重寺（其一）駿豆の界」沼津市内浦重寺秋山家所蔵
- ② 「建切網漁絵馬」大正2年12月 絵部分：縦60×横91cm 口野金桜神社所蔵、沼津市歴史民俗資料館保管

魚見のある風景①

本年度の企画展で収集した絵葉書関係資料の中から魚見が写されている資料を紹介します。

漁期になると魚道に沿って岸に近寄る大型回遊魚をいち早く発見するために、ミネドンと呼ばれる監視人が詰める見張り小屋である魚見には、岸辺の崖の上や山腹に石積みの狭い平場を造り、そこに建てられた山小屋形式のもの、丸太を組んだ四本柱の塔の先端部に床と屋根をつけた櫓形式のもの、崖上に自生する松の太木に梯子を取り付け、高所の枝を利用して小屋掛けしたのがあります。山小屋形式のものは魚見小屋、櫓形式のものは魚見櫓、魚見の作られた自生する松の太木は峰松などとも呼ばれています。

ここに紹介するものは絵葉書ではなく、絵葉書の作成のために撮影された風景写真のガラス乾板に残されていたものです。ガラス乾板は写真フィルムのネガと同じ役目をするもので、これから印画紙に焼き付けたり、印刷のための版を起こしたりします。

内浦重須にある弁天島(現在は陸続きとなっている)を南から望んだもので、島の裏側が重須の集落です。島の頂上の左手に櫓が建っています。手前には漁船とそれを覆う舟屋が写っています。その前の地先の海は與瀬という建切網漁(大網)の漁場(網戸)となっていました。その漁場に近づく魚群を見張るためのものでした。



重須弁天島

資料館からのお知らせ

企画展を開催しています

平成25年1月14日から4月14日まで、平成24年度企画展「海辺の情景～絵葉書に見る地先の漁場～」を2階展示室で開催しています。

大型回遊魚の漁場として栄えた、かつての原から戸田までの海岸線が写された絵葉書を中心に、同じ場所の現在の姿も併せて紹介しています。

また、地元で発行された古い絵葉書も紹介しています。



企画展の様子

歴民講座を開催しました

平成25年1月27日に市内三枚橋の沼津市立図書館の4階視聴覚ホールで、歴民講座「甲斐武田氏と沼津～三枚橋城将高坂源五郎を探る～」を武田氏研究会の平山優氏を講師に迎えて開催しました。

戦国時代の甲斐武田氏とこの地域の関わりを年代を追って、詳しく説明していただき、甲斐にとってのこの地域の重要性を知らされた内容でした。

また、三枚橋城の高坂源五郎は、甲陽軍鑑で有名な高坂弾正の次男春日信達であり、信州海津城から派遣されてきたことなどが話されました。



歴民講座の様子

沼津市歴史民俗資料館だより

2013.3.25 発行 Vol.37 No.4 (通巻197号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp